①博多校区大浜社会福祉協議会（福岡県福岡市）

（構成：民生委員児童委員、自治会、
公民館、ふれあいネットワーク、
ふれあいサロン、子育てサロン、
助っ人センター、老人クラブ各種団体）

②《活動主体の概要》（平成 27 年 4 月 1 日現在）

○総 人 口：　５，１８７人
○高齢者数：　　６６５人
○世 帯 数：　３，６７３世帯
○産業構造：　第３次産業が大部分を占める
○地理的構造：北側は福岡市の海の玄関口である中央ふ頭で、博多港国際ターミナルやマリンメッセ福岡、福岡国際会議場などがある。東側は御笠川、南側は明治通り、西側は大博通りで区画されている。博多の伝統文化が息づく下町の風情が残る土地柄である一方、マンションも建ち並んでいる。

③活動のきっかけ

大浜社会福祉協議会（以下、「大浜社協」）では、平成８年度から民生委員児童委員を中心に見守り活動（ふれあいネットワーク活動）を開始した。

平成２４年３月に、長年ふれあいネットワークの代表を続けてきた方が代表を辞めることをきっかけに、ふれあいネットワークそのものを解散したいとの表明がなされた。

しかしながら、ふれあいネットワークは、大浜社協にとって欠かせない活動の一つであることから、大浜社協役員会で議論し、代表一人に任せがちであった運営を、関係者全員が何らかの形で関わること、そのためにそれぞれが持っている情報を共有することとし、ふれあいネットワークは新たなスタートを切った。

④活動方法

対象者は主に一人暮らしの高齢者で、一人の対象者を一人の訪問員が担当し見守り活動を行っている。

活動内容は、声かけ、安否確認、話し相手が中心で、ゴミ出しや病院付添いを行う場合もある。

ふれあいネットワーク、民生委員児童委員、社協の三者が、２ヵ月に１回定例会を行い、一人一人の活動報告を行い情報共有を図っている。

平成２５年６月～社協内に生活支援ボランティアグループ「はまおう助っ人センター」（平成２６年７月～町内助っ人サポーターチーム）が発足。各町内の「助っ人サポーター」が隣近所への声かけを行うとともに、校区全体のボランティアグループである助っ人センターでは、ふれあいネットワーク訪問員では対応が難しい様々な生活支援を行っている。

ふれあいネットワークと生活支援ボランティアグループが協働して、重層的な見守りを行っている。

⑤工夫点

活動に携わる三者（ネットワーク、民生委員、社協）で、対象者全員についての必要事項を共有することで、訪問員が一人で活動するのではなく、他のメンバーと一体となって活動できるような仕組みにしている。具体的には、ふれあいネットワークの班・対象者一覧表を年度初めに作成。定例会における活動報告の内容を書き込み、対象者の現状を全員で把握するようにしている。そのことで、定例会を待たず、また自分の見守り対象者に限らず日常的に気づいたことをお互いに話し、対応できる土壌づくりが可能になった。

平成２７年度には、ふれあいネットワーク活動と生活支援活動に加え、自主防災活動との連携にも取り組んだ。

⑥成果

活動に携わる三者の定期的な情報交換により、一緒に活動しているという連帯感や、それまでは個人のボランティアとして行っていたふれあいネットワーク活動について、対象者を地区全体みんなで見守るという意識が生まれた。

ふれあいネットワーク活動、生活支援ボランティア活動のほか、認知症サポーター養成講座や福祉座談会での見守りマップ作成などに取り組み、それぞれの活動が相互に連携して行われている。

⑦課題

活動者が固定化していること。いつものメンバー以外が活動できるように、活動の幅を広げる工夫をしたい。

自ら「助けて」と言い出せない人にどうアプローチするのか。特に集合住宅はどんな人が住んでいるのか、外からわかりにくい。

集合住宅での見守り活動の難しさ。共同玄関がオートロックの場合は、外部の住民の見守りでは限界がある。

⑧代表者、事業者等の声

ふれあいネットワークにしろ、助っ人センター・助っ人サポーターチームにしろ、すべての活動の根源は地域の人同士のつながりにある。そのために、できるだけ多くの人が集い自らの意見を言える場を提供すること、そこから出てきたアイデアや企画を活かしていくことを大事にしている。地域福祉の活動はボランティア的で、それ故に、いま流行（はやり）の費用対効果や効率化＝結果としての仕組みではなく、共に住まいする人々の協働にこそ意義を見いだし、共に住まいする人々の笑顔を活動の成果として享受している。